

ある政治的教育学者の生涯から

— パウル・エストライヒの自伝の抄訳(1) —

船尾 日出志
(哲学教室)

AUS DEM LEBEN EINES POLITISCHEN PÄDAGOGEN
— Die Übersetzung der Selbstbiographie von Paul Oestreich (1) —

Hideshi FUNAO
(Lehrstuhl für Philosophie)

Resümee

Paul Oestreichs Schulmodell und seine theoretischen Gedanken über Erziehung fanden bisher wenig Interesse in der erziehungswissenschaftlichen Forschung. So gibt es in Deutschland seit 40 Jahren keine Neuauflage seiner Schriften oder eine das Gesamtwerk behandelnde Darstellung. Auch in Japan beschränkte die Beachtung Paul Oestreichs sich lange nur auf die Geschichte der Pädagogik.

Paul Oestreich, mit dessen Lebensgeschichten und Werk ich mich seit 1988 befaßt habe, erschien als besonders geeignet, die Verflochtenheit von lebensgeschichtlicher Erfahrung, der Zeitnot der Epoche und der pädagogischen Theorie beispielhaft aufzuweisen. Gerade seine utopische, über alle Maßen gesteigerte Hoffnung durch einer neuen, besseren Welt zu gelangen, ließ sich aus biographischer Sicht interpretieren.

So möchte ich von nun an die Selbstbiographie von Paul Oestreich übersetzen. Seine Autobiographie "Aus dem Leben eines politischen Pädagogen" erschien zuerst 1926, also im Alter 48 Jahren, in der von Erich Hahn herausgegebenen Reihe "Die Pädagogik in Selbstdarstellungen". Oestreich brachte dieses erste Manuskript, das bis 1926 gereicht hatte, unverändert und fügte den zweiten Teil, 1926 bis 1945 umfassend, hinzu.

Neben seiner Autobiographie zählen die Monographien "Die Schule zur Volkskultur", erstmals erschienen 1923, "Der Einbruch der Technik in die Pädagogik" (1930), sowie die Aufsatzsammlung "Die elastische Einheitsschule" von 1921 zu Oestreichs bedeutenden Publikationen. Ich werde auch sie in Zukunft übersetzen.

はじめに

従来取り組んできたパウル・エストライヒについての学習成果を不十分なながらも最近まとめた¹⁾。そのまとめたものを読みなおしてみると、エストライヒについても、徹底的学校改革者同盟についても実はほとんど何も明らかにできていないことを痛感せざるをえない。そこでエストライヒの主要著書を再度丁寧に読む作業にとりかかることを決意した。

先行研究をふまえても、その作業はやはり重要である。なぜならエストライヒの学校モデルとかれの教育についての理論的思考は教育科学研究において従来ほとんど関心をよばなかったからである。ドイツにおいても、ここ50年近くかれの著書の新しい版、あるいは全著作を取り扱う叙述は存在していない²⁾。

ドイツにおけるエストライヒへの注目は永く教育学

の歴史に限定されていた。そこでは、かれは決まって社会主義の意味における生産学校理念の代表者として配せられている³⁾。マルティン・ヴァイゼ (1948年) とマンフレート・ラトケ (1962年) の研究はエストライヒにおける政治学と教育学の関係を研究している⁴⁾。70年代にはエストライヒの生活および仕事についての個別研究が誕生した。1973年のかれの大学教授資格請求論文「パウル・エストライヒの文化政策と教育学」のなかで、ヴィンフリート・ベームはエストライヒの教育学思想の諸原則を明らかにし、そしてかれの学校政策的な仕事の伝記的・現代史的・思想史的制約性を叙述しようとした。ベームの労作は、包括的な書簡集、自伝の草稿および個人的な資料というようなエストライヒの遺産のなかの数多くの未発表資料を含むヴュルツブルク大学のエストライヒ・記録保管所を利用した。ベルンハルト・ライントゲスの叙述「パウル・エスト

ライヒと徹底的学校改革者同盟』(1977年)のための資料基礎をなしているのは、もっぱら雑誌「新しい教育」のみであった⁵⁾。ライントゲスの同盟についての叙述において、同じ信条をもつ教育(学)者たちの同質的な団体の印象が生じる。かれらの共通の目標はエストライヒのさまざまな要求の実現であるとされた。より良い資料的基礎にもとづいて、イングルト・ノイナーの学位論文「徹底的学校改革者同盟」(1980年)⁶⁾はことのほか個別化され、そして啓発的である。ノイナーは同盟の成立および諸活動を、そしてその歴史のなかでの個々のメンバーの意義を研究している。かの女もまた同じくヴェルツブルクのエストライヒ・記録保管所を利用している。

そのように現在までの研究状況を考慮した場合、実は1973年のベームの論文が最も重要なのである。ベームはエストライヒのさまざまな生活場面を特徴づけることによって、かれは「エストライヒの若干の中心的な思考様式と行動様式がかれの個人的な前史に、そして一定の伝記的決定要因に」ならびに特有の時代史的な情勢に原因が求められるということを示している⁷⁾。4つの問題複合(時代批判と文化批判、全面的に陶冶された人間の問題、社会主義の概念、有機的学校の概念)の考察によりながら、ベームは、エストライヒの思考のなかに再発見される思想史と社会史のさまざまな影響を明らかにしている。

すなわちエストライヒの母国であるドイツにおいてもエストライヒ自身の著書の再版等はなされておらず、エストライヒにかんする先行研究についても今から20年以上前のものがいまだに最良のものなのである。

今回からエストライヒの主要著書を翻訳していく。最初に自伝にとりかかる。動機は上述した事情にあるが、特に最初に自伝をとりあげるのは、筆者がパウル・エストライヒの生涯の魅力に圧倒されたからでもある。しかし特にかれの場合、生活史的経験とその時期の時代的困難と教育学理論のからみあいを示すことが特に有効であると考えからでもある。まさに新しい教育によって新しい、より良い世界に到達するというかれのユートピア的な希望は伝記的な視点から解釈されうると考える。

次に底本について説明する。エストライヒは1926年に自伝『ある政治的教育者の生涯から』を出版し⁸⁾、1947年の版で大幅に増補した⁹⁾。ここで翻訳の対象とするのはその1947年の版である。この第一報では1878年のかれの生誕から第1次世界大戦の終結までの部分を翻訳する。

自伝の翻訳が終了した後、『教育学への技術の侵入』(1930年)、『人民文化のための学校』(1923年)の翻訳に移り、それらすべての翻訳が終了した後、本格的な考察を展開するつもりでいるので、翻訳文につい

ての訳者による注釈〈...〉は必要最小限にとどめる。また【...】は文脈をとらえやすくするために訳者による補足である。エストライヒがしばしば使用している感嘆符は、ここでもそのまま残した。

注

- 1) 拙著『パウル・エストライヒ—徹底的学校改革者同盟の歴史教育・平和教育』学文社、1996年
- 2) 1970年に短いテキスト集が『基本命題における教育学』というタイトルでマンフレット・ホーマンによって編纂されている。Hohmann, M. (Hg.): Pädagogik in Leitsätzen, Heidelberg 1970.
- 3) vgl. dazu Böhm, W.: Kulturpolitik und Pädagogik Paul Oestreichs, Verlag Julius Klinkhardt Bad Heilbrunn 1973, S. 20.
- 4) Weise, Martin: Pädagogik und Politik in der entschiedenen Schulreform Paul Oestreichs. In: Pädagogik. Heft 2, 1948, S. 9-15.
 ヴァイゼはここにおいてエストライヒの考えにそくして、政治的従事が教師および教育者の課題や責任と関連づけられるべきかどうかを説明した。
 Radtke, Manfred: Paul Oestreichs Kampf für die Demokratisierung des deutschen Schulwesens. Habil. Schur., unveröffentlicht. Greifswald 1962; hier zit. nach: Böhm 1973, S. 13.
 ラトケは学校制度の民主化のためのエストライヒの闘争およびかれの政治的・世界観的立場を、かれの生涯の細々したこと、およびさまざまな状況を模写することによって、叙述しようとしている。
- 5) Reintges, Bernhard: Paul Oestreich und der Bund Entschiedener Schulreformer. Rheinstetten 1977.
- 6) Neuner, Ingrid: Der Bund Entschiedener Schulreformer. Bad Heilbrunn 1980.
- 7) Böhm 1973, S. 177.
- 8) それは当初は次の文献において出版された。Hahn, Erich (Hg.): Die Pädagogik in Selbstdarstellungen. Leipzig 1926, S. 139-176. そして同じ年に“Aus dem Leben eines politischen Pädagogen”というタイトルでもって刊行された。
- 9) Paul Oestreich: Aus dem Leben eines politischen Pädagogen. Selbstbiographie. Volk und Wissen Verlags GMBH・Berlin/Leipzig 1947.

パウル・エストライヒ

『ある政治的教育者の生涯から—自伝』

1947年版序文

1926年にフェリックス・マイナー社で刊行された『自己叙述における現代の教育学』の第一巻は70歳のシュタニスラオス・フォン・ドゥニン-ボルコフスキー(Stanislaus von Dunin-Borkowski)、ゲオルク・ケルシェンシュタイナー(Georg Kerschensteiner)、ルドルフ・レーマン(Rudolf Lehmann)、ヴィルヘルム・ライン(Wilhelm Rein)およびわたしの論説から成っていた。もっとはわたしはまだ48歳だったのであるが。以来、本当に恐ろしい体験の20年間で過ぎ去った。その4人の本の仲間はドイツの文化が恥辱にまみれる以

前に亡くなった。わたしだけが闘争、卑下および悲惨を耐え抜き、そしてあらゆることを何とか切り抜けたようであり、そして今や、自身ほとんど70歳なのだが、誤って導かれ、かつ台なしにされたドイツ国民の気高い、全体的な、世界に向けて成熟した形態をめぐるわたしの青年期およびわたしの壮年期の文化闘争を再開する。少しは疲れているが、しかしコンラート・フェルディナント・マイアーズ・フッテン (Konrad Ferdinand Meyers Hutten) のように、きっぱりとし、そして切望している。

「わたしが世界から帰らぬ旅に出るべきとき、まず照らされた小道を見なければならぬ！」

わたしはここで1926年までのものである最初の原稿を変更なしに掲載し、そして新たに、1926年から1945年までを包括した第2部を付け加える。その第2部は深みへの転落および歯をくいしばって耐えたが、しかし決して怯むことなく、そして怒りが鼓動が激しくなったカタコンベ生活についての報告である。占領時代について語ることはまだ禁じられている。

この叙述が、わが国の新しい教師たちに、かれらの人生を正義の真理性と教育的な愛のなかで、意欲しつつ、格闘しつつ、達成しつつ、歩むよう鼓舞してほしいものである。

1947年11月

パウル・エストライヒ

回顧と自己批判：1926年までの人生

ある哲学、ある理論、ある綱領がある全体性の全体的表現であるとき、その内容とその形態はそのことを証明しなければならず、しかしその表現が十分な効果を発揮しうるのは、その全体性の歴史と本質が厳密に知られ、そして徹底的に把握されている場合だけである！あるイデオロギーが受け入れられたり、勉強されたり、外から組み立てられたりするのでなく、真に個人的経歴とともに成長するとき、そのイデオロギーは、なるほど父親なしでも時代を越えて歩みうるにちがいないが、しかしそれは、証人と被造物と一緒に世間に登場する場合には、直接的に心を打つであろう。それゆえ、この自伝的・伝記的・観念記述的スケッチの思想は、それが客観化する能力と成熟を有する人間によって作成されるときは、正しい。しかしそれは完全には実行不可能である。というのはルソーの告白は、理念担い手としてのかれらの自己維持のために生活のなかで闘争的である人々には、かれらの生涯の終わりを前にしても、勧めることができないからである。というも至るところで泉は塞がれ、そしてさまざまな怪物が閉じ込められているにちがいないからである。しかしそれらの怪物は、それらの囁きと威嚇でもって非理性的にはあるが規定的であったし、そして規定的である。とりわけ、本だけが新しい本を証言するわ

けではない場合には。以下の——非「科学的」——スケッチはそれゆえ——そしてそれだからこそ——この僅かな頁でいわゆる変化に満ちた生涯を追跡することを試みるのである。

わたしは本来的に一連の「教育学者」のなかのよそ者である。というのはわたしは教育学的人間ではなく、政治的人間だからである。政治的人間にとっては、しかしすべての政治的構成衝動は、人間教育と民衆教育と国際教育への意志のなかで、現代における永遠的なものへのそのますます遠慮会釈ない深化において終結する。わたしには、教育的なものについての体験と覚醒から急き立てられるその道筋が、そこにおいて常に人間の国の門の近くまで到達できる唯一の道筋であるように思える。体系の研究、隙間のない「科学性」への自己の直覚の建設と拡大は、無条件に生活の流れとの関連を切り離すとはかぎらないが、しかしその生活の流れには感覚器官の代わりに、感覚装置が関係づけられる。その感覚装置はきわめて強いヴァイタリティーによってしか再び有機的になりえない。「教育学の研究」は本来的に、すでに全体的になっているものにとってのみ価値をもち、その他のものにとっては、それ[[「教育学の研究」]]は棒に縛りつけるものであり、そしてその他のものを、性格豊かなごつごつしたものに成長させる代わりに、方法的に真っすぐ成長させる。「教育学」は教育者的人間 (Erziehermenschen) のかわりに、繰り返し「学校親方」 (Schul-Meister) を生み出している。理論と体系が「生活」をより完璧に「公式」にすればするほど、それらの公式のもとで、自己の本質性にたいする若者の意志が、それだけより苦しんで呻く。教育者たちはまさに、かれらが時代の最良のメカニズムを代表し、そして来るべき必要性の思考により傷つく度合いで、有用になりうる。ベテナー、方法学者、科学者、段階—選抜—分類係は害悪である。教育者はあらゆる分析的知識を再び意識下に沈降させねばならない。かれがそのことを最も良くできるのは、あらかじめ定められた進路とは違う進路で「成った」ときである。技術的、芸術的、政治的人間は、かれらが自分自身について信じているよりもより多く他者のなかの人間性を愛するとき、さまざまな教育的効果を達成するのである。しかし教育者を職業とする者もまた、全体性への憧れがかれをして繰り返しかれの殻を爆破させているとき、非人間的なものなかに余すところなく入り込んでしまう必要はなくなる。かれの可能性に、かれの現実性が休みなく高まっていればいるほど、それだけより弾力的・正當にかれはかれの尺度を絶対的なもの、つまり永遠の人間性生成に合わせる。あらゆる個人とかれの世界の運命の戦いのなかで。わたしの成長過程は「出世する」が、しかし魂は売らないプロレタリアートの「反徒」のそれである。家具工の息子として、1878年3月30日に生まれたわたし

は、次のような環境のなかで育った。そこでは生きるための騒々しい闘いを前に、思慮深さのための時間はまったくなく、さまざまな農村風の習慣の破壊のなかに工業の高まりの代用財の「幸福」が詰め込まれているゆえに、完全に無文化的となっているような環境のなかで。戦争《普仏戦争のこと》後のあの飛躍の10年間は、予定された競争調和へのその信用とともに、プチブルジョアジーとプロレタリアートの数えきれない数の家族において魂の絆を破壊した。というのは収入の「幸福」への追及は労働時間の制限がないせいで、絶え間なく影響を及ぼしえたからである。小都市複合、すなわち手工、販売、庭園耕作市民、若者や徒弟たちの一群の泊まりと賭い、食料雑貨商や食糧小売、小売におけるそのトラスト形成は最も有能な人々を余すところなく食い尽くした。というのは夕べの休息も日曜日の休息もなかったからである。とりわけそのような人間水車《当然、比喩である。つまり水車のように四六時中働かされていること》における婦人の運命は恐ろしい。家族の輪がつながっているのを、かつてはせいぜい祝祭日が見たが、いつもは企業と「仕事」が統治している。【以前は】そのための空間と自由が許すところで、生活され、食べられ、休憩され、眠られた。今では生きた労働装置《lebendig Arbeitsapparat：労働者のこと》のその作業方《Schicht：同一就業時間に仕事に就く労働者全体のこと》にとって、休憩時間規定が救済である。しかしその救済を、かれらはかれらが余りに消耗していたゆえに、落ち着いては享受できなかった。

そのような収入隷従のなかでは、子どもの成長のための生活空間はない。その上、狭い部屋のなかに病気が住みつき、兄弟たちが死に、妹が5歳で病み衰えて墓に入るとき、そこにおいて庭園、草原、飼う兎、チーズ、屋根裏や倉庫の上に登ってうろつくこと、というような小さな喜びが確かに作用する世界が見られているが、しかし臆病な天分がまったく孤独となり、そしてその背後で実体性が自己を十分に押さえこむことができる殻が生み出されていうこともまた把握された。あらゆる者は自分一人のために生きており、母親の労働で堅くなった両手が気づかわしげな子どもの頭を軽くなでることができるといことはほとんどなかった。学童が家庭の歯車に完全にはめ込まれていることはまったく自明であった。「散策する」は他人の概念、わたしが学校から帰宅したとき、やったことのすべては何らかの目的追求、すなわち庭や店の世話、ギムナジウムの第4・5学年以降は図書整理！そして一連の病気によって、しかし何よりも8歳の時の事故によって苦しめられた。その事故はわたしを半年という期間、家に縛りつけた。きわめて深刻な頭蓋骨の負傷、腕の複雑骨折。子どもがその期間ずっと痛みの連続によって怖がり、そしてそれを克服したことはほと

んど奇跡である。もちろん身体的成長においておおいに妨げられ、そして魂的に永続的に曇らされた。

緊張して、黙って、底意をもって、社会にたいして敵対的な自己感情をもって絶え間なしに前哨に立つというような子ども時代の雰囲気。おとぎ話、ロビンソンおよび革靴を履いた猫、発見や征服の物語り、すなわち若者や超人のお話が完全に生活構造や存在構造に応じて、繰り返しむやみに欲しがって求められる「自己」生活から疎遠な代用世界であった。かくして意識された苦悩は人々を分裂させ、そして両親のすべての外的功名心計画にたいして子どもの内に敵対者が成長する。「向上」している子どもたちをもつ家庭の悲劇は本当にあつと言わせるようにはまだ描かれたことはない。ここに最も大きな、最も気掛かりな、最も心を揺さぶる文化問題（原注：間もなく再版される予定のわたしの論文集『懲罰機関か生活学校か』についてのわたしの論説とも比較せよ）がある。その問題に普通の、公式的教育学は解答する意志もないし、できもしない。「陶冶」、「教化」は等級創出、偶像化、疎外、（生活にたいする）「自己防衛」、物質的段階分けであるのか、あるいはそれは配列、すべての力の喚起、十分に生氣を吹き込むことなのか。「陶冶」は強奪、財産なのか、あるいはそれは広い、豊かな精神や財が活発に動く世界における深められた特性なのか。両親世界の調和のない稼ぎ手の苦悩から、解答が非常に簡単にやってくる。すなわち「若者はいつかより良い生活ができるはずだよ！」「陶冶」はよりのんびりできる現存在への道だよ！それと並んで父親のなかでは、経済力を支配するために地に足をしっかりとつけた大職人—経営主の経歴についての計画がさまよっていた。中核にあったのは英雄的意欲であった。その英雄的意欲は、「才能ある」息子の民衆学校から「高度な」学校への通例の進学は、その息子を頭脳化に、すなわち「実践的」労働の軽視に、学校知恵隆起の「精神的」高慢にさらすということを理解できず、さらにその種の「陶冶」が役に立たなくさせることであり、すべての力が「頭脳」へと展開するという「人文主義的」な、わけの分からない不具化過程であるということを理解できなかった。すなわち、まだまだ基盤の弱い《直訳的には「子どもの足の上の」》「完全性」であるだけでなく、それどころか9年間を通じて十分に詰め込まれた「精神」の担い手としての完全な非展開性が目標である！ことを理解できなかった。

あらゆる若者の孤独は大きい。苦悩のもとで高度に「教化されている」小ブルジョアジーの息子の孤独は何倍にもなっている。民衆のなかに根づいているが、民衆から日々疎遠に、他の人々が理解せず、かれらにとって等しく非常に超越的である諸事物に取り組み、そして敵対的、貴族的心情であると自惚れつつ、しかも小ブルジョアの・生産の仕事日のあらゆる物質的骨

折りと尽力でもって負担をかけられ、手足は泥や汚物のなかにありながら、思考のなかで高く舞い上がり、芸術的に開発されたブルジョア階級の妬ましい世界にたいして傷ついて。その芸術的に開発されたブルジョア階級の妬ましい世界は自己の薄汚れと比べて「軽蔑され、憎悪され、避けられた！そう、避けられたのだ！というのはここでは革命的構造の人間が生活していたからだ。すなわち、上昇人間はぺこぺこすることで順応し、そしてかれの「有能さ」が乗り越えてしまう時代遅れの家柄領域をすぐに嘲笑する。しかしここでは針は常に自分の胸にたいして向き、そしてあらゆる発展段階、あらゆる高揚、あらゆる優美がプロメテウスのように争いながら、苦悩のもとで信じられず、辱められて、最終的に受け入れられる。そのプロレタリアートは、かれが恥ずかしいと思わねばならなかったことが、恥ずかしかった！かくして青年期は耐え抜かれ、そして戦い抜かれ、一人の反抗的な人物が学校時代を通じて「口げんかし」、闘争的なものへの衝動から、美にたいするきわめて深い愛情から、興奮状態の「英雄精神」のなかで自分の品位を汚しながら、ナイフ学生組合の、ダンス稽古の片隅の、授業をさぼる生徒の、教師ペテン師の、革命的新聞サークルのすべての冒険を横断して、かれの学校の「模範児童」であらざるをえなかった。すなわちあらゆる若者の思慕は自分の「シシリー島」を探し求めた（エルンスト・ゴルトベックを引用すると）のであった！それがお説教網のなかに迷い込むときには、そのような兩極—夢遊病状態は痛い目にあう。わたしはそれを回避できたし、その青少年期の三重の記帳（家庭、学校、「冒険」領域）は純粋に区別された。したがって後に他者の干渉によって妨害されることなく、諸部分が再び互いに見いだされた。というのは不屈の誠実性は（それは花の純粋性における小さな青少年の悪事のすべての背後に維持されている。すなわち「冒険」はまさに抑圧された「青少年文化」—能動性の反発行為である！）全体性の世間的成熟なしには生きることができなかったからである。青少年の教育者である諸君は過度には助力しようと欲するべきではない。というのは諸君はたいてい助力できないからである！ただ、夢想家の経歴を諸君の硬直した、死んだ存在にもとづいて評価をするな！

病気の妹が死んだので、わたしは「大学で勉強する」ことを許された。言わば、偉大な数学者がわたしの中に潜んでいた。しかし、わたしはそのことを決して試験や職業上の必要を越えては検証できなかった。というのは生活のための闘争はわたしを常にたいへんな貧困のなかにおいたからであった。すなわち家庭にたいする心配、社会的不安定性、社会改良主義的な、党派加担を罪悪とみなす人間、——与えられかつ稼がれた——生計費の窮屈さ、激しい、組織的な犠牲性！かくして本来的に「付随的な事柄」が常に主要な事柄となっ

ており、そして数学、物理学、化学、哲学、教育学、近代語（わたしは当初はまだ学びたかった）、それらすべては確かに章ごとに活を入れるさまざまな印象を与えたが、しかし全体としてはただ「卒業」されただけであり、魂は文学的な空想世界のなかに包みこまれた。さらに「材料」の反抗心や加算から犠牲とされている人間が姿を示す、ということが欠けていたし、生活の意味はなお「市民」であるように思えた。当時のアルコールを含んだ小説が、やけくそで真剣に受け入れられた。「プレーメンにおける市役所地下レストランにおける空想」は、文化的な自己に到達しないか、あるいはまだ到達していない少なからずの若い「科学」者たちにとって危険であった。大学の学生であった頃の最も美しい体験はベルリンでは劇場の夕べであったし、グライフスヴァルトでは何回かの散策の時間およびヨットに乗ったことであった。あとは知識と「享楽」が貪られ、生活は「興味」、痙攣、葛藤に満ちていた。振動し続ける周囲！わたしたちは当時、つまり30年前にはなおかなり「普通の養成課程」からは自由であった。むしろそれは幸運であった。技術的安定性は苦悩なしに容易に中核を強化させた！

国家試験の後、ケルン、オストフリーズラントのレール、バルメンにおけるフリードリヒ・ヴィルヘルム・ギムナジウム、ギムナジウムと実科ギムナジウム、今再び非常にしばしば名が挙げられる修道院付属学校、ヴッペルフルトの高等実科学校での実習年および仮採用年が続いた！きっちり半年ごとにおこなわれた環境の変更、それは常に新しい導入、発見を強いた。イメージや形態の充実ぶりはびっくりするほど大きく、興奮の波は分厚く次々とやってきたが、しかし【きっちり半年ごとにおこなわれた環境の変更は】たいていきわめて深刻なかき乱しを阻止した。当時は志願者不足の時代であった。その時代には5人の学校長および学校評議員が1人の志願者に採用を申し出た。そのことは次のような構造が純粋に形成されることもまた助けた。すなわち「上役」や「部下」をもたない自律的人間がますますより以上にビジョンおよび現実となった。すなわち、わたしを他の誰も善導できない！

そのために、何よりも増大する政治的激情がわたしを急き立てた！才能ある教授学者、およびすべての子どもの物的なものと青年的なものに——たとえまだ不自由であるとしても——共感的に結合している者は、確かにたいていかれの事実に熱意とかれの自然な、陽気な親切さゆえに、「好かれる」教師であって、そして決して執念深い若いいじめ人ではなかった。しかし——教育的感動は存在しなかった。すなわち優しい、専門的かつ人間的に優れた「職務遂行」は自負心であって、満ちあふれているというよりも、むしろ抑制されていた。当時、まさに「身分」運動の最盛期、その運動はわたしもまた把えていたのだが、専門科学的にレベル

の高い、社会的に器用な、生徒という「材料」を事実的に、かつ好意的に、権限をもち、かつ寛大に理解していくという教職従事者の理念をもちながら、【その教職従事者は】かれの時間を、その時間が「勤務外で」地位、給与および授業時間数をめぐる闘争によって吸収され尽くされぬかぎり、ますますより以上にすべての教材の教授学的磨き上げに用いた。かれが——パンのための職業が昼に「片付け」られたあと——午後、美学的、科学的、技術的「私的」領域において楽しまない場合には、若干の特別な者だけが当時、教師たちのなかで青年運動、青年文化、青年心理学にたいする理解の端緒を代表した。わたしたち他の者、つまり教育学的・哲学的「愚か者」の軽蔑者は、「立身出世主義者」を嘲笑した——そして結局ある確かな理由をもって。というのは帝国主義的、ドイツ国粹主義的運動、艦隊扇動、植民地扇動、青年ドイツ扇動、体操扇動等のすべては、あらゆる献身をうさんくさいものにしたからであった。というのはそれらの運動や扇動のトップにいる人々のたいは昇進させられ、そして今や常に、さてそれは再び何のためにおこなわれているのか、という考えが行為を汚したからである。「お金になる」理想主義は宿命的に周囲の人々の思考と感情を物質化し、そしてそのことは最も清潔な人々の翼を萎えさせる！敵対的な立場が、活動にはるかにより以上に有利になる促進よりも、もっと個人的な危険を約束したとき、事情はまったく違う。それはわたしがすでに以前から加わっており、わたしが今、燃えるような魂でもって身を捧げている政治的闘争におけるような場合であった。

「教養」階層から別の階層に上昇する者は、気持ちよく自分の「職務上の」成功を喜び、ピラミッド型システムや選抜システムを肯定し、それゆえ保守的となる。というのはかれは(時には苦々しく——憂鬱に——信念なしに——献身する)理念的価値の地位階段の象徴および保証としての人間の物質的ランクづけを宿命的であるとみなすからである——さもなければ、かれは革命家となる。というのは、かれのうぬぼれの強い気分によって静められない無郷土性はかれに「あらゆる人にとっての郷土！」という課題の認識と活動的な開始を課すからである！「世界改良者」として、かれは純粹の事務机での設計者あるいは形式的議会主義的、党派政策的法律変更者でありうるし、かれはまた実践的諸関連のきわめて厳密な詳細知識から、民衆教育の仕事においてのみ長期的な見通しで救済への道が開かれているのを見ることができる。

わたしの子ども時代はわたしに小規模手工業と小規模商売についての正確な知識を、プロレタリアートのおよび農業的家政、それらに属する思考様式を調達してくれた。そのことをわたしは正確に知った。さまざまな事実レベルの間で、かくして一人の小さな人間は、

誰もかれに「教え」てくれなかったのだが(というのは誰も時間がないし、そして隔離のための場所がないゆえに)、上り下りし、そして、そこではさまざまな現実的価値の交換の「実践的」生活は子どもたちを大人の小型版としてしか使用しえず、それゆえかれらに非教育学的に剥き出しに出会うので、ませてかつ早熟的になり、そして生活に強くなる。もしくは【その小さな人間は】生活経験のすべての背後でサナギになる！——そのことは多彩に、複合的に揺れる青年の魂を与えた。すなわち上昇漢は民主主義的な平等性人間および反軍国主義者であり、職人の息子は反ユダヤ主義者であり、ロマンチストは権力政治家であった。堅固なりベラルな、あるいは国家信望的な定式化を有していたその時代の教師はさまざまな問題の外にいた。と言っても、それらの問題は小都市ではごく僅かな人にしか意識されていなかったが！大学では、まだ脱却されていなかった行動の不器用さはわたしを公共社会から引き離した。しかしわたしは1898年にベルリンを去ったとき、フリードリッヒ・ナウマン《Friedrich Naumann》の国民社会的軍団に参入した。当時、最後の反ユダヤ主義的殻が剥けた！その後わたしの生涯は田園地域で過ぎ、したがってとりあえずは工業地帯では終了した。しかし田園地区でも工業人間のすべての問題は、それに耳を向けることができるあらゆる者の前で響いた。そして——わたしは耳を向けようとした！大人になる若者は土台から完全なものを建設しようとする！そのことは当時においては、政治的なものにおいて最も必要で、そして最も実り多いものと思えた。外的にはドイツのための自由な道、内的にはあらゆる人のための同じ人間の尊厳、糧と権利！それからすでにすべてのものが別のものになるのである！その形式的な平坦さはしかし、土地改革的、女権拡張的、社会的、衛生的、簡単に言えば文化的諸要求の採り上げによって耕される。古い国民社会主義はまさに決して「大衆」ではなく、先遣隊および独り者の材料でしかなかった！国民教育思想はわたしによってすでに当時、意識的に肯定され、バルムの数年間(1902年から1905年)は社会自由主義の衣を着た国民社会主義のための絶え間無い勧誘、アジテーション、組織であった。トラウブ(Traub)はわたしたちの最もラディカルな演説家であった！工業企業体について洞察を獲得する機会は熱心に利用され、労働運動、自由思想運動ならびに社会民主党の運動とますます接触がとられるようになった。全体としてわたしたちを次のような信念が支配した。すなわちわたしたちは大衆組織を通して権力奪取へと前進しなければならず、その後に世界を、それがわたしたちの共同責任に適合して道徳的・公正的に存在しうるよう秩序づけるという。わたしたちは、それぞれの社会的拘束をひとつの理論へと純化した不明確な社会主義者であった。そこにおいてわたしたち

が活発に活動した学校は、しかしわたしたちにとっては政治的綱領の一部でしかなかった。すなわち世俗的、国民的統一学校！わたしたちにとっての不明確な確信的要求。民衆学校教師たちのさまざまな教育運動はわたしたちの浜に波を起こすことはほとんどなかった。成人たちの困窮、秩序だった世界、テーマはそういうものだった。大きなストライキに際しては、わたしたちは労働者の味方となった。「赤い」大衆と公然と協同し、炭鉱夫たちのためにストライキの資金を集めることは、当時、勇気がいることであった！

1905年のベルリンへの移住は、その間にかなり世故にたけてきた者《エストライヒ自身のこと》を、ベルリン「自由思想」(Freisinn)に身を置くという混乱へと導いた。その団体は結局のところさまざまな新しい人間の流入が我慢できないことであるのを知った。国民社会主義者が自由思想連盟のなかでそうであったように、社会進歩主義者たちは地域自由思想連盟のなかで酵母として働こうとした。等しく無駄に、つまり幻想主義ないし究極の順応！2年間はベルリンにおける自由思想的保守主義の驚愕の安息を乱す者としてのブライトシャイト (Breitscheid)、フォスベルク (Voßberg)、エストライヒであって、そしてあちらこちらで染みは田舎にも浸透した。数週間の帝国議会選挙のアジテーションは1906年から1907年にかけて郊外の生活への重要な洞察を与えた。市会議員および集会の世話人として、わたしは激しくぶつかる歯車装置と闘争のなかで、「上役」たちの嫌気の対象となった。かれらは繰り返す、というのは密告は止むことはなかったので、鼻腔《馬を操作するためのもの》を据え付けようとした——無駄だったが！わたしたちは国民教育の宣教の担い手であると感じ、そしてあらゆる圧迫に増強された活動と偽りのない呼びかけによって回答した。連合政策的な不安定性のなかでプロイセンの保守主義もまた、「公式に」攻撃ポイントが与えられていない場合には、もはや安易には極度の暴力性を勝手に発揮しえなかった。そしてあらゆる者は、フリードリッヒ・ナウマンおよびその後ますますより強靱になる指導性のなかでテオドール・バルト (Theodor Barth) が自分たちの回りに集めたまさにあの若い無鉄砲者たちの群れから献身性の聖なる真剣さを見てとった。しかし妄想患者たちは避けて通れ！

連合政治は決断を強いた。共同統治か、あるいは国民の基本権か、民族的・軍国主義的なものか、あるいは民主主義的・人間的なものか。自由思想連盟における3年間の内部戦争でわたしのなかに蓄積した反感、あの陰謀家もどきの彼方で自己を深めることへの憧れ、フリードリッヒ・ナウマンへの絶望、それらの結果わたしはある日1ダースの地位と委託を辞退した。少なくとも文化の裏切りに関与しないため！とはいえ——新しい義務が起こってきた。民主主義連盟が変化

に富んだ、流浪の一軍を集め、そこにおいて綱領にしたがった活動、建設的活動、自暴自棄的活動の数年が経過した。バルトの死後は自暴自棄的に。その後その形成物の中途半端さが完全に明確になり、そしてわたしは「野生」となった。大々的な孤立の数年が続いた。その休暇において、わたしは妻とヨーロッパをかなり遠くまで遍歴したが、しかし何よりも留保なき自省の数年であった。わたしを年々ますます魅了していた専門研究とならんで、身分闘争における独立——無謀な闘いとならんで、今や従来の多かれ少なかれ教条的に受け取られた政治的、社会的、経済的内容の政党的知恵の習得から、ますますより深くかつより自主的な塹壕掘りや検証が、内気な独自の追究と試行が生じた。それは今や政党の文書や雑誌から、国民経済的・政治的な基本作品に進行し、そして時にはわたしは以前に深く心に刻まれた反感を克服し、そしてなるほど懐疑的に楽しみながらではあったが、哲学書に、そしてそれどころか教育学書に取り組んだ！わたしの教師気質はその方向での従来の禁欲のもとでは、それほど苦しむことはなかった。すなわち個々の人間への善き意志と事実的精通性は存在したし、そしてアビツァーに向けての若者たちの促進の道において、アビツァーの後にかれらの「より確かな世話」が待ち受けているのだが、自分の責務を果たすために十分であった。そして授業および「青年補導」におけるその若者のより以上の軍国主義化はまさにわたしの生活観の方向にある人々を、公的教育制度に参加させるより、むしろ敵対させた！わたしはわたしなりの仕方、集中的な授業のなかで、工場や仕事場見学のなかで、わたしの生徒たちと一体となった。わたしを厳しい事故がさまざまな随伴事情を通してここでもまた長年にわたる不機嫌へと、そしてさらにより以上に本に追いやるまで。当時わたしは特に労働組合と協同組合運動に、そしてまた国際的諸関連にも気をかけていた。学校ではアビツァー合格者の世代の連続がわたしにますますより以上に活動様式の個別化を強い、多年にわたる実験室授業はわたしに学校での労働実行と生徒講話の恵みを気づかせ、そして自己の苦悩と自己の成熟はわたしを若者にたいしてより開放的に、より自由にそしてそれゆえより共鳴的にした。学校の変革によってその規律手段を放棄しえるという願いがますますより生き生きしてきた。教材および教授技術の老練性の増大、自分の生徒たちの生活への歩み出とともに、今や政治的正義性を求める教師《エストライヒのこと》にとって自己の行為の意味を問うことが始まった。そこにおいて卒業していく若者、かれらは本当に年老いていたし、かれらは燃えていなかったし、かれらはさまざまなチャンス慎重に考慮し、そして学校がかれらに提供したかなり快適な現存在にかなりの従順さでもって感謝した。今や、以前であればそのために解決策として短期間の

逃げ道が甘んじて受け入れられた疑問のすべてが【わたしには】聞き逃せないほど大きく聞こえるようになった。というのは【次のような疑問にたいする】感覚と思考が孤立と訓練によってきれいに、かつ強くされたからである。すなわち君は誰を何を目指して教授しているのか。【その答えは】さまざまな関連をである！国民経済の需要および国民経済の見通し、職業相談、個性と求めにしたがう職業の選択をである！職業統計学と精神工学(Psychotechnik)が今や視野に入ってきた、そこからわたしはいくつかの論文をもつ教育学的刊行物のショーウィンドに足を踏み入れたが、成果よりは失望がより多かった。

そうしているうちに戦争が起こった。かろうじてスコットランド的高地のロマンティックな田園風景において、今やドイツの戦争の気分的興奮状態において、そこに——しっかりと人道性の立場を固持しつつ——偉大な民衆の情熱に共感しようとする燃える欲望によって関与されていただけだった。この戦争時代はわたしの生涯のダマスクス時代《ダマスクスは使徒パウロの回心の場所であり、したがって「回心時代」の意》であった。その時代を叙述することは、ここでは——すでに紙幅ゆえに——可能ではない。平和主義的・民主主義的・社会主義的生活理解をもつ者は、大言壮語的・軍国主義的・強欲的公共社会のなかで、英雄栽培を強いられていた学校のなかで、若い人々のもとで生活しなければならなかった。その者は死と嘘をその若い人々の背後に恒常的にみたくゆえに、今ようやくかれらを本当に愛した。その者は外的現象の狂気《“Wahnwitz”をそのニュアンスを出すため「狂気」と訳したが、差別的な表現である》に吐き気をもよおしつつ、戦闘している諸国における平和運動の再強化への参加によって、実際の事情および責任分担について知らされ、そしてそれゆえ気が抜け、希望なく、怒りに軋み、沈黙を余儀なくされ、繰り返し勝利の報告のエーテルのなかで酩酊している人々のもとで細々と暮らさざるをえなかった。その者は地獄の現存在がどのような感じかを学んだ。そしてかれは繰り返し、かつますますより深く無理をした孤立の地下牢に沈んだ。当時、心を引き裂かれた人々すべてが絶望的に仰々しい専門性のなかで集中的に営んでいた「事実的なもの」において、そして心的なものにおいて【無理をした孤立の地下牢に沈んだ】。実験室管理に、教師用図書室の管理が数年にわたってとってかわり、複数の学級の結合、永遠の配置転換、絶え間ない解雇の「資格」試験、ますますひどくなる資金不足、そのすべてはきわめて惨めな生活水準において途方もない力の浪費を必要としたが、しかし吹聴的にこしらえることのない「英雄」的人間にとって意識の苦悩に耐える唯一の可能性であった。軍事郵便の波は常に新しい死体を家庭にもたらし、そして結局純粹に怨念と憤激をもたらした！今では、

当時国家反逆罪人のように語ったほとんどすべての人は「立派」である。(政治的協力は——精神工学的に確認されている！——異論の余地なく善なる記憶をもつ人々にのみ認められるべきである。記憶は酩酊から守る！)それは恐ろしかった。声のない孤独におけるその負担は！とはいえあらゆる苦悩は熟し、そして新しい力を生じさせた。当時わたしはシュトリンドベルク(August Strindberg)とニーチェに深く傾倒し、そしてフィヒテ、ショーペンハウアー、ラガルデ(Paul de Lagarde)およびプランク(Max Planck)は哲学への喚起者であった。当時わたしは時代の事実的抑圧のなかでダーウィン、ラマルクを通して、マルクスおよびヘーゲルを通して、ミュラー—ライアー(Franz Müller-Lyer)、カウツキー、クーノ(Heinz Cunow)、ベルンシュタインを通して、すなわち知性の峰のすべてを通して自分を鍛えた。そしてトルストイ、ドストエフスキー、ローラン、シュピッテラー(Carl Spitteler)が繰り返し登場し、今や吟味の後では、むしろ好んで感動させられるのであった！本来的・人間的なものなかに最終的な救出はあり、新たな建設への、つまり狂犬病に免疫のある人間の教育への最後のかすかな希望は悲嘆にくれていた！

戦争初期におけるわたし自身の社会的活動、わたしの妻の戦争の時代を通じての、すなわち婦人組織における、後には「消費者の利益のための戦争委員会」(Kriegsausschuß für Konsumenteninteressen)における活動は、わたしを雑多な冊子および雑誌における出版活動へと引き入れた。とりわけ「戦争委員会通信」(Korrespondenz des Kriegsausschusses)および「行為」(Tat)誌において。「行為」誌では、わたしは時代の「生産」腐敗を糾弾し、そして再三にわたって消費者組織を鼓舞し、消費者議会を要求した。それにたいして雑多な新しい文書の結社が生じた。すなわちディーデリッヒ(Eugen Diederich)の理念、ラーテナウ(Walther Rathenau)の理念、目標サークル(der Zielkreis)、「新祖国」同盟(Bund“Neues Vaterland”)、今では「人権のための連合」という名称に変更されている「民衆の権利のためのセンター」(Zentralstelle für Völkerrecht)が。経済的な階級闘争家として「ブルジョア的」感情的平和主義を拒絶した徹底的平和主義者から、平和主義的活動家が誕生した！あらゆる従来への権威は揺らぎ、たいいていの権威は崩壊しかつ粉碎された。国家の権威も、政党の権威も、信条の権威も、職業の権威も。他人の言いなりになる者たちは皆、吹き消され、そして糸がもつれたような状態になった！とはいえ内容や信条なしに、仕事の意味なしには生活できないとしたら、バラバラになったものを何とか拾い集め、耕し、種をまき、そして新たに栽培する。かくしてわたしは当時新たにユートピアンたちに取り組み、そして——生活がわたしにストップをかけたとき

ろで終えた。【そこで得た結論と言え】諸君は人々を、かれらが人間のように生きることが許されているときに、ようやく教育できるにちがいない！諸君はかれらに自身が活動自由であることを知らしめねばならない！選択自由な生産的な学校を！かくしてわたしは1916年にそのような最初の提案を「行為」誌においておこなった。その遠慮がちな企画がさまざまな場所であまりに「革命的である」として拒絶された後のことであつたが、それでもってひとつの道が歩まれた。その道の上で、今や時代が、職業従事において目覚めさせられた注意力が、そこにおいて情熱性と適任性と知性が一致する切り出された問題性を推し進めることの一貫性が、わたしを不断に前進させた。今や民衆陶冶、構造陶冶および職業陶冶の問題すべてが、ますますより以上にひとつの領域を支配した。その領域は地中に埋め込まれた政治学、国民経済学、多面的な生活経験と職業経験を通してあらゆる実り豊かさを用意するものであつた。その実り豊かさは、たとえそれが欲していなくても、前進させるにちがひなかつた。今やわたしはまたあれこれの教育学図書に——それまでわたしは人々を「介して」しか読んでいなかった——ヴィネケン、ケルシェンシュタイナー（とはいえそれもまたほんの僅かだったが）に取り組み、今やわたしには徐々に青年運動の意味が明らかになってきた！わたしたちは若い人間として青年運動について何も体験しておらず、その際わたしたちは政治的に包囲されていたが、今やその戦争は苦悩からの新たな誕生をわたしたちの

ために生み出してくれた！戦争の最後の何年間に、わたしはすでに、「帝国青年防衛法」に逆らう若者と同じ前線に立っていた。

終わりが迫った。教師たちは以前から不愉快になっていたし、若者たちは責任逃れをするようになっていた。（一般的な農業労働の観察の試みは息苦しい恨みを両親グループのなかにも浸透させ、若者はすでに「ストライキ」をした。若者にふさわしく反抗のなかで——今日のように「民族主義的に」）以前から、両目でぬすみ見ることが学ばれ、そして「成績」は副次的であるように思えた——何のために。年々すべてはますます荒廃し、そして詐欺師的になった。すべての壁を通して腐敗が侵入したが、次のような場所でのみまだ何かが残っていた。すなわち生徒たちと教師たちのもとに良き意志、仲間の開放性および時代の死への事実に感動が粘り強い働きを許す場所で。その後、崩壊のなかでまさに、すでに自律的生活を自己のなかで担っていたそれらのグループは自己を貫き、そしてその時、一般的な不安の震えのなかでしっかりとした態度を示し、かれらの例は生徒グループと教師グループのなかに生徒自己管理、教師自己管理、学校自己管理への一般化する呼びかけを鳴り響かせたということは、何と驚きか！慰さめの形象と反抗の形象から、秩序の細胞が生じた。

（続く）

（平成8年9月11日受理）